

短歌 令和四年度阿南市文化祭秋季短歌誌上大会選

自由題 入選

この星に戦は続き星祭り子は筆太く「仲良し」と書く
神原 常経

懐かしき孫の甚平見つけたり我の野良着に変身させる
松江 敬子

不自由なる我を介護し帰省の子鍋びかびかに帰りゆきたり
森田 道子

荷作りの仕方でわかる宅急便がんじがらめの息子の荷が着く
金本ひろみ

我が脳は只今休んでおりますと言わぬばかりに言葉出て来ず
山本 賀代

拝殿で泣く児をあやす宮司さん親族あたふた初宮参り
西井あつ子

白桃と共に届きぬ夏便り達者でおろなと絵手紙添えて
矢野 道子

朝なさな杖つく夫に合わせ行く露の白玉光をはじく
横山みつ枝

老い猫は死期が迫れば居なくなる人には出来ぬ生き方なりや
中山 善嗣

玄関のベビーシューズは手に乗るも抱えきれない温もりを持つ
水口 明美

「きれいだよ」母の最期の薄化粧末期の水は口唇撫でる
手塚都樹子

たつぷりの湯舟につかりフレッシュ背筋を伸ばしねこ背対策
宮崎真由美

人伝てに内緒の話広がりて変異しながら七十五日
吉形 和恵

俳句 阿南市俳句連合会選

つくばいの光一筋冴返る

水温み父子で渚駆け競べ

梅の雨たまの非番となりにけり

山腹に避難所抱き山眠る

初旅やマンゴジュースと椰子葉陰

島を突く灯台の白寒の明

水俣の蘇生の海で潮干狩

早咲きの河津桜の満開だ

蠟梅の花咲く庭や香り立つ

春障子閉めて程良き居間となり

柏木 暁代

奥田 蒼朗

金本ひろみ

米田 豊子

藤崎 恵竹

張本 可仙

森 伸

古川北斗星

鳥海 勇二

吉崎 晶子

川柳 阿南川柳会選

すぐ涙なのに口では放つとい

荒れた花壇に花ちらほらと村の春

イケメンに見惚れて荷物放置する

カニ料理お喋りの妻黙らせる

目が回るほどあたふたと医者通い

冷戦か妻音なしの構え取る

一般応募

見栄を張り弾んで出して財布空

指輪抜き女一人は強くなる

手始めにかかし布団で節電し

建て込んで緑の風はもう吹かぬ

橋本 征介

佐藤つたえ

篠原 良子

鈴木レイ子

多田紀久代

西田 修身

秋川 和子

島尾美津子

泰地 重美

武田 敏子

漢詩 阿南漢詩研究会・青松吟社選

山寺見花（崔魯の作に習う）

遅遅曉晃照梅花

馥郁薰香如白霞

小止東君招訪客

馬蹄未到宿寒家

城満 航也

梅花を照らす

白き霞の如し

訪客を招くを

寒家に宿せよ

春風桜堤

撩亂櫻花映日鮮

春堤處處醉容妍

津峰遠望滿身飾

香雪紛紛那賀川

池田 行子

日に映じて鮮やかに

醉容妍なり

滿身の飾

那賀の川

アントニオ猪木を悼む

忽焉訃報病床身

藥石無功天上賓

燃盡闔魂娛人去

寰中第一惜斯人

大地 和子

病床の身

天上の賓

人を

斯の人を惜む

